

旭川医大 病院ニュース



(編集) 旭川医科大学病院
広報誌編集委員会委員長
廣川博之

<http://www.asahikawa-med.ac.jp/>



年頭にあたって —Together and Let us—

病院長 松野 丈夫

新年明けましておめでとうございます。昨年吉田学長の舵取りの元、病院職員の皆様のご協力としっかりとした支えのおかげで旭川医大病院のほとんどのデータが右肩上がりであり、何とか医療の荒波を乗り切ってまいりました。まずは病院職員の皆様に心から感謝・御礼申し上げます。

さてこの1年間に病院でおこったことを少し述べてみます。

- ・平成23年11月にリハ科外来診療が始まり、平成24年4月からリハ科の医師およびPT, OT, STの新設・増員によるリハビリテーション部(リハ科)の強化がなされました。リハビリテーション部門の充実がチーム医療の1つの柱でもあり、私が病院長になって以来の夢の1つがかなった思いであります。
- ・病院内の施設面では、昨年末には透析室の増床を行い、本年2月からはICUの増床が予定されています。今後は長年の懸案であった「入退院センターの拡充」が予定されています。施設面では予算の問題、病院内のスペースの問題もあり、充実には時間がかかりそうですが、今後も「slowly but surely」の精神で1つ1つ改善・充実を計って行きたいと思っております。
- ・昨年2月には「働きやすい病院評価、ホスピタリティ」の認定を受けました。国立大学病院では3番

目、道内の病院では初めてでもあり、非常に嬉しいことだと思います。吉田学長は6年前に学長就任以来大学職員および医大生に対して数多くの優しい施策を実行しています。これからの旭川医大病院もホスピタリティ認定の名前に負けない様に、全職員に優しい病院を目指して行きたいと思っております。

- ・昨年の夏にはロンドンオリンピックがあり、盛り上がりました。日本代表として勿論個人競技で活躍した選手もいたのですが、女子サッカー、女子バレーボール、フェンシング、水泳の男女のリレー、女子卓球等々、印象に残ったのは団体競技ではなかったでしょうか。医療の世界においても昔はドクターを中心として回っていたのが、最近ではドクター、ナース、医療技術職員、事務職員が一体となり患者と家族を中心とした輪を形成して行うチーム医療の重要性が叫ばれております。最近テレビで某携帯電話のCMで流れてくる「Together, Together…」という歌があります。ご存知の方もおられるかもしれませんが、これは第35代アメリカ大統領であるケネディーの就任演説を元にして1969年代に作られたコーラス曲です。「Together」の後には「Together, let us explore the stars, conquer the deserts, eradicate disease, tap the ocean depths…」と続くのですが、現在の医療の世界において最も必要とされるのがこの「Together」と「Let us」という精神ではないかと思っております。病院職員の皆様、今年も「Together」の精神で頑張ってください。宜しくお願いいたします。

広範囲肺静脈隔離術 (EPPVI)

～心房細動に対するカテーテル焼灼術～

内科学講座 循環・呼吸・神経病態内科学分野 田邊 康子

心房細動は日本国内だけでも、約130万人が罹患している common disease です。

高齢者社会の進行に伴い患者数は増加し、罹患率は70歳代では約5%、80歳代では約10%です。

治療はまず薬物治療が第一選択とされていますが、薬物治療は薬を飲み続ける事で不整脈予防を期待する治療法ですので、継続的な予防措置となります。薬物療法で完治することは期待できません。加えて心房細動はもともと薬が効きづらく、一時的には予防に有効であっても、時間経過とともにその効果が弱まってしまう現象も知られています。

そのため近年になり、薬物治療抵抗性の心房細動の治療法として、カテーテルを用いて、心房細動が生じないように心房筋を焼灼して心房細動を根治する治療、カテーテル焼灼術が行われるようになりました。心房細動のメカニズムは現在でも十分に解明されているとはいえませんが、最近になり肺静脈付近からの心房性期外収縮が頻回に起こり、これが心房細動を引き起こすトリガーとなっている場合が多いことが分かってきました。発作性心房細動の場合は9割の症例で、肺静脈近傍の心房性期外収縮が、心房細動を引き起こすと言われていています。カテーテル焼灼術により、左右肺静脈の周囲を焼灼して肺静脈を電気的に隔離、すなわち肺静脈近傍から発生する心房性期外収縮が左房内に伝導しないようにする

(広範囲肺静脈隔離術EPPVI) ことで、心房細動細動の発生を防ぎます。

方法は大腿静脈からアクセスし、右房から左房へ心房中隔穿刺法でカテーテルを進めます。心筋焼灼用のカテーテルに加えて、更に2本、左房—肺静脈間の電気的な隔離の完成を確認するリング状のカテーテルを挿入します(図1)。また左房の解剖学的構造、左右・上下肺静脈の形態の把握、焼灼部位の確認のため、当院では3次元CTと3次元マッピング装置(CARTOsystem)を併用しています(図2)。治療時間は約3時間程度、麻酔は静脈麻酔で治療後はすぐに目が覚め、翌日からは歩行も可能であり、入院期間は約1週間程度と患者様への負担も軽い治療です。成功率は、1回目治療後は発作性心房細動では70～80%、慢性心房細動では60%程度と、他の不整脈のカテーテル焼灼術と比して低めですが、再発の原因の多くは焼灼部位が治癒して隔離した部位の伝導が回復してしまうためなので、再発症例には2回目の治療を加えて治癒部位に再焼灼することで、発作性心房細動では90%、慢性心房細動でも、稀に発作性心房細動を起こすだけになる症例を含めると80%近くになります。

当科でも2008年より心房細動に対するEPPVIを開始し、道北地域で唯一、本治療をおこなっている病院として年々症例数が増加しています。現在ではEPPVI適応は、若年の症例や、発作性・慢性にかかわらず薬物治療で満足のいくコントロールが得られない症例と、徐々に拡大されつつあります、今後も治療技術やデバイスの改良により、更なる適応症例の拡大、成功率の向上が期待される治療法です。

図 1

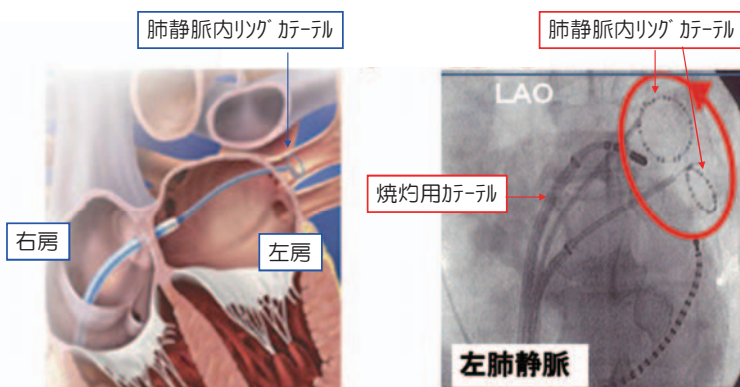
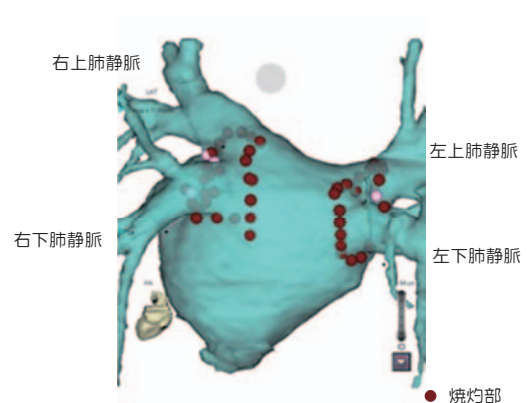


図 2



眼科専門外来 「ロービジョン外来について」

眼科 石子 智士

眼科の病気の中には、最先端の治療を行っても、現在の医学では十分な視機能回復が困難なものがあります。このような人に対し、残された視機能をいかに上手に使えるかを考え、適切な補装具を判断する「ロービジョン外来」があります。旭川医大病院では10年以上前からこの外来を行ってききましたが、診察に時間がかかるうえ診療報酬が認められていなかったため、ごく限られた施設でのみ行われてきました。この春、ようやく保険点数が認められましたが、この条件である厚生労働省主催の研修会を修了した眼科医は、今春の時点で北海道では私を含め14名しかおらず、普及には時間がかかりそうです。

さて、ロービジョンと言っても視力が悪い人のみならず、視野障害やまぶしさなど、いろいろな視機能の障害が対象となります。実際のご要望としては、「読み書きがしたい」と「まぶしさを取り除きたい」が多くを占めます。前者に対してはルーペや拡大読

書器など、後者に対しては視力低下を最小限に抑えまぶしさの原因となる光のみを遮断する遮光レンズなどの処方を行っています。また、文字の読み書きを補助する罫プレートなどのロービジョングッズを紹介する事もあります。このような補装具の中には身体障害者手帳を持っていれば公的補助が出るものもあり、この外来受診の前に申請を済ませておく方が良いでしょう。また、視機能障害の程度によってはできることには限界があるのも事実です。そのためこの外来は、主治医が必要と判断した人に対し完全予約制で行っています。見えにくさのために不便を感じている方、治療方法はもうないと言われ今の見え方で諦めていた方でこの外来受診をご希望の方は、すでに眼科を受診している方は主治医に相談し、受診したことが無い方はまず初診していただき、予約を入れてもらってください。ロービジョン外来で見え方を改善する方法が見つかるかもしれません。



国立大学病院初の ドライケミストリー分析装置導入

臨床検査・輸血部 米沢 太亨

2012年6月より、時間外・夜間休日の時間帯における生化学検査装置として「ドライケミストリー」を原理としたVITROS 5600 (写真) が国立大学病院としては初めて導入されました。

ドライケミストリーの「ドライ」は、反応・分析機構が「DRY」であることを示し、乾式測定試薬スライド (写真) を用いることで原則、水を使用しない装置です。当院の日常検査は「WET法」と呼ばれ、液状の検査試薬を用い、分析の過程や装置の洗浄に水が使用される装置を使用しています。「DRY法」「WET法」各々の特徴について、表に示します。

	利 点	欠 点
DRY法	<ul style="list-style-type: none"> 電気のみで稼働 単位項目あたりの分析時間が短い 操作が割と簡便 	<ul style="list-style-type: none"> 測定対象物以外の検体は測定できない 使用検体量が多い 測定レンジが狭い
WET法	<ul style="list-style-type: none"> 使用検体量が少ない 測定レンジが広い 	<ul style="list-style-type: none"> 水・電気両方が必要 水回り特有の汚れ



ところで、当院は2011年11月に災害拠点病院 (地域医療災害センター) として道から指定を受けております。原則として、24時間対応できる設備、

ヘリコプター発着場、医薬品の備蓄、水や電気などライフラインの確保、耐震化構造などが必要条件になっています。先の阪神大震災・東日本大震災では、最初に復旧したものは電力だったとされ、電力のみで検査が実施できるDRY法は有事の際には大きく活躍するものと思われま

す。昨今、臨床検査では検査データの標準化に対する動きが活発になっております。「標準化」は検査施設間差をなくし、「いつでも」、「どこでも」検査データの互換比較を行えることにあります。ドライケミストリーは、「WET法」に比して、この標準化・互換性作業に少々の課題がありますが、操作の簡便性や、災害時での活躍が期待される装置ですので、休日夜間の患者診療に必要な検査結果を迅速かつ正確に提供できるように今後も、スタッフ一同管理・運用に一層の努力をしていきたいと思います。





広げていこう「検査の日」

臨床検査・輸血部 中央採血室 柴 彰 則

まずは、いつも円滑な採血業務にご協力いただきまして、ありがとうございます。

先日、中央採血室の外待合掲示板を使って催しました「11月11日 検査の日」週間につきまして、趣旨と内容を簡単に紹介させていただきます。

「検査の日」とは何かと言いますと、「臨床検査振興協議会」(臨床検査のデータを精査して、そのデータがどのように生み出されているのかを知っていただき、正しい検査の知識を広めるために出来た団体。)は、11月11日を臨床検査の日と制定して、国民のみなさんに臨床検査が病気の早期発見や早期治療につながる有用なものであることを広く知っていただくために広報活動をスタートしました。

私たち臨床検査・輸血部もその活動に参加して、昨年、第一回「検査の日」の活動を展開しましたが、今年は臨床検査の入り口である「採血」について、採血業務中に採血担当者がよく質問されることをQアンドA方式で5つの質問と回答という形にして、中央採血室外待合の掲示板に展示しました。



また、昨年同様に検体系(尿を用いた検査、貧血の検査、糖尿病の検査など)や、生理系(心電図、心臓超音波検査、脳波検査など)の検査を簡単に紹介したパンフレット(9種類)も用意しました。

みなさんが受けられた検査の基準値やその検査の簡単な説明を解説した「検査の見方」のパンフレットも好評で、合わせて持ち帰られる方も多かったよ

うです。

これらのパンフレット類は採血の外待合掲示板に常備してありますので、どうぞご利用なさってください。

今回は採血室中心ということで、主な採血のスタッフ紹介も兼ねまして、氏名入りの顔写真も張り出してみました。

何回も撮りなおした写真をしばらくの間、掲載しておきたいと思いま



す。(女性陣からは反対されましたが……。)

せっかくの「検査の日」ということですので、患者さんが受けていらっしゃる「臨床検査」についての質問を受けてはどうだろうということで、「検査に関するアンケート箱」を設置して、質問された内容についての返答を、後日掲示板に展示するという企画も行っており、目下その作業の最中です。

最後に余談にはなりますが、その他の「11月11日」は他にどんな日があるのか少々興味がありましたので調べてみました。

これがけっこういっぱいあって、「いい日、いい日」の語呂合わせから「介護の日」、乾電池の+(プラス)、-(マイナス)を「十一(じゅういち)」にみたくて「電池の日」、「1111」が麺の細長いイメージにつながることから「麺の日」、まだまだあります、11人対11人で行うスポーツから「サッカーの日」、靴下を2足並べた時の形が「1111」に見えることから「靴下の日」など、どれも納得できます。

その中でも、何と言っても一番インパクトがあったのは、「ポッキー&ブリッツの日」で、誰しもが知っているお菓子の語呂合わせですが、その商品のイメージから言っても、これにかなう「イベントの日」はおそらくないと思います。

来年の11月11日も新たな企画で「臨床検査の日」を紹介していきたいと思いますが、「あ！11月11日、ポッキーの日、そして臨床検査の日でもあったね！」と言われるくらいになれるよう来年以降も広報活動を展開していきたいと思いま

Fresh Voice

旭川医科大学職員として

経営企画課病院庶務係 窪田 祐 樹



みなさん、こんにちは。9月より病院庶務係に配属され、4ヶ月が経ちました。今まで病院に関係したことがなかったため、旭川医科大学病院に勤めてからは新鮮な刺激を受ける毎日です。

初めは机上の事務仕事を行うイメージを抱いていましたが、実際に働き始めると予想以上に仕事内容が多岐にわたっており、医療従事者や患者さん、そのご家族の方々と接する機会が多いことがわかりました。まだ分からないことが多く、病院にいらっしゃる方に質問をされる度に知識不足を痛感しますが、対応や案内等がしっかり出来て、感謝された時はとても嬉しい気持ちになれるので、この気持ちを忘れずにたくさん知識を吸収して行きたいです。

また、私の好きな言葉に『最大多数の最大幸福』という功利主義者J. ベンサムの言葉があります。この言葉を聞いてから改めて周囲を見回してみると、楽しい、良い雰囲気は伝わっていき、その場に好影響をもたらす場合が多い、ということがわかりました。実際に人と接する機会が多いということは、その言葉を実践出来る機会が多いことだと私は考えておりますので、仕事を通して旭川医大に関わる全ての人に貢献し、より良い場作りを行っていき、これから精進して行こうと思っています。余談ではありますが、先日クリニックラウンの来院を初めて見て、ベンサムの言葉を実践する姿にただただ感動を覚えるばかりでした。良い刺激を受けられた事、その機会を与えてもらった事に感謝しています。

まだまだ未熟な立場ではありますが、様々な事を経験していく中で少しずつでも成長し、事務職のプロとして責任もって仕事が出来ようようになって行こうと思います。皆さんにはご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、新人らしく元気いっぱい一生懸命に頑張りますので、これからどうぞよろしくをお願いします。



病院ライブラリー5周年記念「読み聞かせの会」を開催しました。

病院ライブラリーは、平成19年4月、東病棟1階に、『医療情報を提供することによって、患者さん参加型医療を支援したい』との思いから開設され、今春で5周年を迎えることができました。

その間、病院の中であって、“医療情報提供の場であると同時に、静かでくつろげる場所”として、たくさんの患者さんご家族にご利用いただいております。

このたび、5周年を記念いたしまして、8月の記念誌発行に続き、10月25日(木)には、旭川市内の「読み聞かせサークル」の方々をお招きして、「読み聞かせの会」を開催いたしました。

当日は、午前中で通常の閲覧・貸出業務を終了し、午後2時半から1時間あまりで行いました。

入院患者さん、外来患者さん、ご家族、付き添いの看護師さん等が参加されました。5名の読み手の皆さまがそれぞれに選ん

だえほんを読まれました。厳選されたえほんは、大人でも楽しめる内容のものばかりで、味わいのある読み聞かせに、最初ざわついていましたライブラリー内が、“しーん”と静まり返って、皆さま、えほんの世界に入り込んでいました。

小休憩の時の簡単な「手あそび」にアンコールがかかるほど、皆さま方はリラックスされ、楽しまれたご様子でした。

この「読み聞かせの会」が治療中の皆さまにとって、心休まるひとときになったことを嬉しく思います。ご参加いただいた皆さま、ご協力いただいた皆さまに感謝申し上げます。

これからも、たくさんの方々にご利用していただけるライブラリーであるよう、気持ちよく過ごせる空間づくりにも気を配って、時には、イベントも企画していきたいと思っています。

なお、当日の様子を、ホームページの病院ライブラリーと、ライブラリー通信“こんにちは☆病院ライブラリーです。No.16”に載せていますので、ごらんください。

また、当日読まれましたえほんは、すべてライブラリーにありますので、どうぞいらしてみてください。





平成24年10月及び11月に院内でコンサートを行いました。

10月13日には、市内の女声合唱団コール・グリーンの皆さんによる「ななかまど 秋のコンサート」を開催し、「ふるさと」などの懐かしい歌のメドレー、「証城寺の狸囃子」などの童謡、交声曲「こどもの世界」などの曲が披露されました。また、最後には会場に聞きに来られた患者さんも一緒に「もみじ」を歌い、楽しいひとときを過ごしました。

10月28日には、緑が丘の混声合唱団グリーン・ハーモニーの皆さんによる「ホスピタルコンサー

ト」を開催し「ふるさと」の四季から、「落葉松（からまつ）」などの曲や、「小さな世界」や「見上げてごらん夜の星を」などのポピュラーな曲が披露されました。

また、11月25日には、同時期に市内で開催されていた「旭川・ウィーン国際ヴァイオリンセミナー」事業の一環として、ウィーン国立音大生、旭川出身のピアニスト安田里沙さんによる「ホスピタルコンサート」が行われました。当日は入院患者さんのほか、寒く天候の悪い中にもかかわらず市民の皆さん



も多く観覧され、会場である正面玄関ホールは、暖かいヴァイオリンとピアノの音色に包まれていました。

クリニクラウンがやってきた

11月22日（木）の午後、クリニクラウン（臨床道化師）が、4階西小児病棟を訪問しました。「クリニクラウン」とは、「病院」（クリニック）と「道化師」（クラウン）とを合わせた造語で、入院している子供たちを訪ね、遊びやユーモアを届け、子供たちの笑顔を育む道化師のことです。

オランダで1990年代から盛んになり、日本でも2005年10月に、大阪で「日本クリニクラウン協会」が設立され、徐々に医療現場に浸透しはじめています。当院においては2008年から定期的に小児病棟への訪問活動が行われています。

今回は、同協会から、2人のクリニクラウン「TOMO」と「いさ」が、来てくれました。



治療や検査のために入院している子供たちも、クリニクラウンの訪問によって積極的になり、一緒に遊んだり、二人を追い掛けたりと楽し

んでいました。

また、付き添いのお母さんや医療スタッフともユーモラスなコミュニケーションをとり、病棟は笑顔に包まれました。



12月21日（金）の午前中、病棟の子どもたちに、サンタクロースに扮した病院長、トナカイに扮した看護部長から、プレゼントが配られました。



最初は緊張気味だった子どもたちも、サンタやトナカイと会話をするうちに笑顔がほころび、病室は明るい雰囲気になりました。



【薬剤部】

新薬紹介 (63)

ダプトマイシン (キュビシン)

本邦では、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌 (MRSA) 感染症治療薬として、アルベカシン硫酸塩 (ハベカシン®)、バンコマイシン塩酸塩 (バンコマイシン®)、テイコプラニン (タゴシッド®)、およびリネゾリド (ザイボックス®) が使用可能であったが、それらに加えて2011年9月にダプトマイシン (キュビシン®) が販売開始となった。

ダプトマイシンは MRSA による敗血症、感染性心内膜炎、深在性皮膚感染症、外傷・熱傷及び手術創等の二次感染、びらん・潰瘍の二次感染に適応があり、皮膚や骨への移行性が良好な薬剤である。更にグリコペプチド系耐性菌やリネゾリド耐性菌にも効果を示すとされている。しかし、左心系感染性心内膜炎は海外臨床試験にて有効性が示されていないため、右心系感染性心内膜炎にのみ使用すること、また、薬剤が肺サーファクタントに結合して不活化されるため、肺炎には使用しないことと添付文書に記載されている。

用法・用量は疾患により「4～6mg/kgを1日1回

24時間ごとに30分かけて点滴静注する」となっており、TDMは不要である。主に腎から排泄されるため、腎機能低下患者 (CLcr=30mL/min未満) に対しては投与間隔を延長する必要がある。

作用機序は、細菌細胞膜の膜電位消失、DNA・RNA・タンパク質合成阻害であり、殺菌的に作用すると考えられている。薬剤のPK/PD (Pharmacokinetics/Pharmacodynamics) は濃度依存型の薬剤であり、グラム陽性菌に対しPAE (Post Antibiotic Effect) を持つ。

重大な副作用としては、ショック・アナフィラキシー様症状、横紋筋融解症、好酸球性肺炎、末梢性ニューロパシー、腎不全、偽膜性大腸炎がある。その他の注意として、可逆的な骨格筋障害を起こすことがあり、クレアチンキナーゼの定期的なモニタリング (週1回以上) が必要である。

新規作用機序のダプトマイシンが登場したことにより、既存薬剤が無効な場合のMRSA感染症に対し、新たな選択肢の一つとなった。しかし、海外ではダプトマイシン耐性の黄色ブドウ球菌や腸球菌の発現が既に報告されているため、投与を検討する際には、専門医へのコンサルトを考慮する必要がある。不適切な使用方法により薬剤感受性の低下、耐性菌発現の可能性があるため、漫然とした使用は避け、適正な使用を願いたい。(薬品情報室 山田 峻史)

【輸血部門発】

HLAタイピング検査

輸血・細胞療法部門では、今年の5月より、骨髄や臓器の移植に深く関わるHLAタイピング (A, B, C, DR)、抗血小板抗体、抗HLA抗体の検査を開始しました。

HLA (ヒト白血球型抗原、HLA; Human Leukocyte Antigen) とは最も重要な組織適合性抗原の一つです。一般に血液型というとA, O, B, AB型といった赤血球の型を指しますが、HLA型は白血球の血液型を示しています。発見当初、HLAは白血球のみに存在すると考えられていましたが、体のほとんど全ての細胞表面で発現がみられることがわかっています。そのため、現在ではヒト白血球型抗原と呼ばれることはほとんどなく、HLAと呼ばれます。HLAの型を調べるHLAタイピング検査は移植におけるドナーとレシピエントとの適合性、HLA適合血小板のドナー選択、各種疾患診断の補助として実施されて

います。HLAは両親からその半分ずつを受け継ぐため、親子や兄弟の間でも一致する確率は低く、まして非血縁間では数百～数万分の1の確率でしか一致しないといわれています。造血幹細胞移植や臓器移植では、自分のHLAのタイプに合わないものはすべて異物 (非自己) と認識して攻撃を始めてしまうため、HLAの適合性が重要視されます。そのために、ドナーとレシピエントでHLA検査を行い、適合性をみとることが必要となります。

当部門ではHLAタイピング検査を開始するに伴い、Luminex装置を導入しました。Luminex装置は最大96検体を同時に測定可能であり、専用解析ソフトを用いることで、96検体を10分で解析することができます。原理としてはPCRにより得られた産物と100色の蛍光ビーズを反応させ、蛍光強度を測定することでタイピングしています。

検査は週1回 (水曜) で実施していますが、お急ぎの場合やご不明な点などありましたら輸血・細胞療法部門 (3381) までご連絡下さい。

(輸血・細胞療法 花田 大輔)

永年勤続者表彰

勤労感謝の日にあわせ、平成24年度の本学永年勤続者表彰式が、11月22日（木）午前10時30分から第一会議室で行われました。

表彰式は、役員及び所属長の列席のもとに行われ、学長から被表彰者全員に対し表彰状の授与並びに記念品の贈呈が行われました。

次いで、学長から永年にわたり本学の発展、充実に尽力されたことに対する、感謝とねぎらいの挨拶があり、これに対して被表彰者を代表して薬理学講座の牛首文隆教授から、謝辞が述べられました。

なお、被表彰者は次の方々です。（敬称略五十音順）



- 安達 智子 (看護部)
- 石川 千恵 (看護学講座)
- 石坂 貴光 (会計課)
- 岩城 静香 (看護部)
- 牛首 文隆 (薬理学講座)
- 太田 一美 (看護部)
- 業天 洋美 (看護部)
- 小出 隆弘 (総務課)
- 澤田 裕子 (看護部)
- 菊池しのぶ (看護部)
- 塩谷今日子 (看護部)
- 平 千亜紀 (看護部)
- 竹川 政範 (歯科口腔外科学講座)
- 谷口 隆信 (生化学講座(細胞制御科学分野))
- 野村理賀子 (看護部)
- 升田 俊樹 (施設課)
- 山崎 和生 (生化学講座(機能分子科学分野))
- 山本 明美 (皮膚科学講座)

平成24年度 患者数等統計

(経営企画課)

区 分	外 来 患 者 数			一 日 平 均 外 来 患 者 数	院 外 处 方 箋 発 行 率	紹 介 率	入 院 患 者 延 数	一 日 平 均 入 院 患 者 数	稼 働 率	前 年 度 稼 働 率	平 均 在 院 日 数 (一 般 病 床)
	初 診	再 診	延 患 者 数								
7 月	人 1,734	人 32,017	人 33,751	人 1,607.2	% 91.80	% 66.03	人 16,142	人 520.7	% 86.50	% 86.45	日 13.17
8 月	1,586	32,370	33,956	1,476.3	91.83	64.94	16,210	522.9	86.86	85.57	13.31
9 月	1,443	29,615	31,058	1,634.6	92.00	62.44	15,454	515.1	85.57	86.14	14.43
計	4,763	94,002	98,765	1,567.7	91.87	64.58	47,806	519.6	86.32	85.34	13.60
累計	9,615	184,352	193,967	1,551.7	91.56	64.01	95,777	523.4	86.94	85.34	14.13
同規模医科 大学平均	9,233	130,289	139,523	1,119.5	88.03	64.59	92,908	507.7	84.81	84.57	15.68

編集後記

あけましておめでとうございます。

我が家では年末年始の過ごし方が徐々に変わってきています。いわゆるテレビ離れです。

特に節電を意識しているわけではありません。魅力的な番組が減ったような気がします。そういえば久しく連ドラを最後まで観ていません。深夜のバラエティもほとんど観なくなりました。スポーツ中継も以前より機会が減っています。サッカーの代表戦も録画して結局そのままのことがあります。

そんな中、明らかに10年前より目にする頻度が増えたチャンネルが、NHK教育、通称Eテレです。平日の朝は「フックブックロー」「0655」「シャキーン！」が我が家の定番ですし、風呂あがりに「100分de名著」「スーパープレゼンテーション」が流れているとつい最後まで観てしまいます。「大科学実験」「デザインあ」は、短時間で内容が濃く本当に

よくできていると思います。

我が家が完全にテレビ離れをするにはもう少し時間がかかりそうです。(薬剤部 小野 尚志)

時事ニュース

News

- ・ 10月13日(日)…ななかまど 秋のコンサート開催
- ・ 10月28日(日)…ホスピタルコンサート開催
- ・ 11月15日(木)…病院立入検査 (医療監視)
- ・ 11月17日(土)…第4回道北がん診療連携拠点病院 共同開催公開講座
- ・ 11月19日(月)・20日(火)…院内感染に係る相互チェック (三重大学病院及び徳島大学病院担当が実施)
- ・ 11月22日(木)…クリニックラウン来院
- ・ 11月25日(日)…旭川・ウィーン国際ヴァイオリンセミナー 出前コンサート開催